

【句釋】 昭應は縣名なり、驪山に在り、天寶の初め、會昌縣を溫泉に折置す、尋いで改めて昭應と爲す。武帝、漢の武帝を出して以て玄宗を言ふ。祈靈太乙壇、「史記孝武紀」に、薄誘忌なる者、泰一を祠る方を奏す、曰く天神の貴者は泰一、泰一の佐を五帝と曰ふ、古は天子春秋を以て泰一を東南の郊に祭る、曰く太牢の具七日壇を爲り、八通の鬼道を開く、是に於て天子太祝言ふ、神官をして其の祠を長安の東南郊に立てしむ、常に祠に奉ずること忌が方の如くす。玄宗が田周秀が言に迷うて老子を朝元閣に祀るは、猶漢武が誘忌が言を信じて太乙を祀るが如し。新豐、漢の高祖、豐の民を徙して以て名けて新豐と云ふ。樹色繞千官、武帝が天の靈を祀る場合、千官も隨うて儀容盛んなり、玄宗も亦然り。那知、武帝も玄宗も千官も共に知らざるなり。今夜長生殿、作者が見し今夜なり、溫泉宮の内に長生殿あり、玄宗が貴妃と密語せし處。獨閉空山月影寒、當時密語を爲し、又百年も千年も長生せんと天に向つて祈りし人は、悉く死し、山は空、月は寒、看るに忍びざる寂寞の状。

【評論】 此の篇、長生を妖人や仙靈に祈りしとて其の功の無きを諷す、前二句は昔年、後二句は今日、盛衰榮枯、是れ自然なるを言ふ、中唐の絶句、此の如きは亦多からざるなり。鍾伯敬曰く、凡そ中古の詩、俱に此の體格を得ることを要す。蔣春甫曰く、古今の感に勝へず、那知の字、獨の字、皆切要。

湖中

青草湖邊日色低。黃茅瘴裏鷓鴣啼。丈夫飄蕩今如此。一曲長歌楚水西。  
青草湖邊日色低。黃茅瘴裏鷓鴣啼。丈夫飄蕩今如此。一曲長歌楚水西。

【句釋】 湖中は青草湖中の景を叙す。青草湖邊、岳州に在り、一に巴丘湖と名く、夏秋水多きときは洞庭と合す、涸るゝときは此の湖先づ乾きて青草生ずと。日色低、夕暮を云ふ。黃茅瘴、嶺外即ち廣東福建にては二三月を青草瘴、四五月を黃梅瘴、六七月を新木瘴、八九月を黃茅瘴と名く、岳州は嶺外にあらざるも此の語を用ふ。裏鷓鴣啼、越鳥は寂寞の地に棲む、以て此の湖中風氣の惡、且寂寞の状を知る。丈夫は自身を云ふ。飄蕩は「オチブレ」。今如此、此の如き蕭條の地に飄泊す。一曲長歌楚水西、飄泊し乍ら悲歌慷慨す、狂奴の故態尙存す、丈夫たる所以。

【評論】 此の篇、湖に托して自身の鬱懷を叙す。黃家鼎曰く、一曲の長歌、丈夫の故歩を失はず。

夜發袁江寄李穎川劉侍郎

戴叔倫

半夜回舟入楚鄉。月明山水共蒼蒼。孤猿更叫秋風裏。不是愁人亦斷腸。



半夜舟を回らして楚郷に入る、月明にして山水共に蒼蒼、孤猿更に叫ぶ秋風の裏、是れ愁人ならざるも亦斷腸

【句釋】袁江は源、江西省袁州府萍鄉縣の瀘溪に出で、臨江府の南十里に至つて清江に入る。李穎川は流貶せられて袁江に在り。劉侍郎も亦貶せられて此地に在り、作者は時に曹王暉の幕府に在り。半夜回舟入楚郷、袁江の鄰國は湖北、即ち古の楚なり。月明山水、月下に舟を回らす。共蒼蒼、山色も水色も一樣に蒼蒼たり。孤猿更、山水蒼蒼、已に凄景なる其の上に、叫秋風裏、猿が秋風に叫ぶを聞くに於てをや。不是愁人亦斷腸、愁人ならざるも斷腸する、況や我は愁人なるに於てをや。【評論】此の篇、即景即吟、深く用意して作りしものにはあらず。蔣春甫曰く、淺淺の語、轉た思の深きを覺ふ。

寄楊侍御

包何

一官何幸得同時。十載無媒獨見遺。今日莫論腰下組。請君看取髻邊絲。一官何の幸ぞ時を同じうするを得る、十載無媒獨遺さる、今日論ずること莫れ腰下の組、請ふ君看取せよ髻邊の絲

【略傳】包何、字は幼嗣、潤州延陵の人、太歴の間、起居舍人と爲る。

【句釋】楊侍御、我が邦の侍從なる職、即ち侍御の官なり。一官、包は起居舍人。何幸得同時、侍御と同時に在廷を幸榮とす。十載は包が在廷の年處を言ふ。無媒、包の官等を進奏する上官無し。獨見遺、楊は進みしこと知るべし、包一人は依然舊官なり。今日莫論、包が他に向つて辯護する。腰下組は腰に着ける印綬を言ふ、組は綬なり、長さ一丈二尺、腰を繞り以て印を係る、金印は紫綬、銀印は青綬、銅印は黃綬、各差等あり。請君看取髻邊絲、官の高下を言はずに君は我が歳幾何か見て呉れ玉へ、髻髮の白く絲の如きにて知れるだらう。【評論】此の篇、今日職員録の六號活字の人に定めし多く當る者あらんと思はる。鍾伯敬曰く深く世味に入る。

汴河曲

李益

汴水東流無限春。隋家宮闕已成塵。行人莫上長堤望。風起楊花愁殺人。汴水東流限り無き春、隋家の宮闕已に塵と爲る、行人長堤に上りて望むこと莫れ、風楊花を起して人を愁殺す、

【句釋】汴河曲、隋の亡滅を痛んで作る、汴河は禹貢に示す澗水、春秋には鄭水、又煖水、後汴と改む、前代此の河に苦しめられ、煖帝に至りて大に開鑿したるもの、河の沿革は非常にあるが、今



略して載せず、源は滎陽縣の大周山に出で東開封府城を経て泗州に注ぎ、以て淮に入る。東流、山東省方面へ向け流る。無限春は、春夏秋冬の春にはあらず、春秋の春を言ふ、幾春を幾年ぞと言ふ意味。隋家宮闕、煬帝が贅澤を極めて結構せし宮闕も、已爲塵、唐の高祖の爲め亡ぼされて跡は灰塵と化す、而かも山河は依然たり。行人、往來する人。莫上長堤望、長堤は隋堤とも云ふ、煬帝が麻叔謀と云ふ技師に命じて築かした堤とす、五百艘の舟を作り、多數の婦女に之を牽かしめ、其の堤下の汗水を往來して劣欲を恣にしたる處、今日は此の堤に上れば、懷古の情に勝へざる故に上り玉ふなと、詩人が忠告する。風起楊花、悲風が柳絮を吹き飛ばして。愁殺人、看ずんば愁へず、看れば即ち愁を生ず、愁を生ずるが故に決して堤に上り玉ふな。

【評論】 此の篇、隋家の滅亡を憐んで作る、語語婉柔にして、全く圭角無く、實に絶句中の上乗、王龍標と肩を比すべし。沈歸愚曰く、七言絶句は中唐、李庶子、劉賓客を以て最と爲す、音節神韻龍標供奉に追逐すべし。行人と愁殺人と人字二字重なる、萬萬移易すべからざるに由る、初學、口を唐賢に藉りて之を學ぶ勿れ。

聽曉角

邊霜昨夜墮關榆。吹角當城片月孤。無限塞鴻飛不度。秋風吹入小單于。

邊霜昨夜關榆に墮つ、角を吹いて當城片月孤なり、限り無き塞鴻飛び度らず、秋風吹いて入る小單于、

【句釋】 曉角、曉天に角聲を聽く。邊霜、邊地の寒霜。昨夜、曉天より言ふから昨夜なり。墮關榆、榆關を倒用して關榆と云ふ、永平府撫寧縣東二十里に在り、一に臨關と名く、秦の蒙恬胡を破り榆を植ゑて塞と爲す、故に塞下榆木多し、榆は和名「ニレ」粉と同じ。吹角、胡兵が之を吹く。當城は城に當るなり、當城と云ふ名にはあらず。片月孤、一本に漢月孤に作る、片月孤を以て勝れりとす、片と孤と接續して用ふること太白の孤帆一片の類、頗る姿致を生ず、月孤は平凡何等の奇なし、片字ありて妙と爲る。無限は多數の意味、鴻の羣を言ふ。塞鴻、塞の上空まで飛來したる鴻。飛不度、塞上まで飛び來りしが、此の角聲を聽いて前に向はずして後方へ退くと云ふ意味、軍中には鴻釋關係の深きものはあらず、我邦源義家が伏兵を識りし事や、上杉不識庵が陣中月三更の詩賦の如き天下皆知る所、鴻の物たる本來哀性を有すればなり。秋風、角聲を送る風、即ち媒介者。吹入小單于、唐の大角曲に大單于と小單于の二曲あり、風が吹き入る小單于是即ち其の側面は鴻が胡天に入るを云ふ、元來單于是支那の太古より蒙古地方に棲息して居りし匈奴の王の名なり、姓は攀鞞氏で、其の國人は撐犁孤塗單于と稱したるなり、撐犁は天の義、孤塗は子の義、單于是廣大の



貌を言ふ、野蠻にして文は微塵も無きが、武を以て屢ば漢人を苦しめ、漢王は女を贈りて閼氏と爲し、和親を求めし事、史上彰彰たり、其の廣大の意味を以て曲に入れしものなり。

【評論】此の篇、角聲を聽いて、以て其の角を詠じたるものなり。黄家鼎曰く、意佳、句更に涵渾、必ず此の如くにして方に是れ作者。吹角と吹入と吹字二字重なる、一本巻入に作る、同字を避けし爲めならん、詩法に於て巻入可、詩趣に於て吹入可なり。

夜上受降城聞笛

回樂峰前沙似雪。受降城外月如霜。不知何處吹蘆管。一夜征人盡望鄉。

回樂峰前沙雪に似たり、受降城外月霜の如し、知らず何れの處か蘆管を吹く、一夜征人盡く郷を望む、

【句釋】夜上は李が上るなり。受降城は一箇處にあらず、處處に有りしもの、「唐書地理志」に、豊州九原郡今日の鄂爾多斯附近に東受降城と中受降城と西受降城とあり、景雲二年に、朔方軍の總管、張仁愿の築く所、然るに「明一統志」に、東受降城は廢東勝州の北八里に在り、中受降城は、大同府山西城の西北五百里に在り、西受降城は古豊州の西北八十里に在りと、然るに又是より前、漢の李陵傳中に受降城に抵り士を休す、師古曰く、抵は歸なり、受降城は本公孫敖の築く所、是れ「一

統志」の中受降城即ち大同府のもの是れなり、此の詩の受降城は即ち大同府に在るものとす。聞笛は即ち蘆管を聞くなり。回樂峰前、「舊唐書地理志」に、靈州「今日の甘肅省寧夏府」大都督府に迴樂縣あり、其の峯未詳と、明の蔣春甫は山西大同府の西五百里に在りと、余案ず、李は姑臧の人、必ず所據あらんと思ひ、「元和志」を讀む、迴樂縣に長樂山あり、舊吐谷渾の部落の所居、恐らくは長を廻と誤寫したるものならん、彼の賀蘭山なぞと對峙して居る、山を峯と書する例は多し、蔣説正しきものと想像す。沙似雪、沙の色が素白なるを云ふ。城外月如霜。山前の白沙と、城外の皓月と相對して夜氣の淒涼を描く。不知、月と沙とは眼に入る故に知る。何處、耳に入るものは出づる處を分明にせず。吹蘆管、故人の笛は蘆葉を捲きて製するもの、題目に笛とあるが、笛の方が適切と思ふ。一夜征人、此の夜胡を征伐に赴きし漢兵。盡は悉や皆より一層強き字全體と云ふ意味。望郷、心は月にも山にもあらず、唯故郷あるのみ。

【評論】此の篇、笛に寄せて征人の情を憐んで作るもの、淒惋千古の絶唱とす、古今諸家評する所、要は絶唱の外にあらず、故に特采せず。

從軍北征

天山雪後海風寒。橫笛偏吹行路難。積裏征人三十萬。一時回首月中看。



天山雪後海風寒し、横笛偏に吹く行路難、積裏の征人三十萬、一時首を回らし月中に看る、

【句釋】 從軍北征、是れ作者が必ず出征したと見るに及ばず、從征者の事を歌うたものなり。天山は三尺童も知つて居る、匈奴は非常に此の山を尊嚴なるものとして禮拜したるなり、天山の名も匈奴が命名せし者、樓蘭や突厥の強族が此の山麓に住して、漢人は屢ば之と戰爭せし也。雪後、天山は雪の融くるは夏期のみ、春秋冬は玲瓏一白なり。海風寒、瀚海即ち戈壁沙漠を指す、海を北に作る本あり、海に及ばず。横笛は漢人の製作にあらず、漢の武帝の時、張騫が天山南路を旅行して以て羌より攜へ歸りしもの、李延年が新聲二十八曲を作る。偏吹行路難、吹く所の曲は行路難のみで、他の曲を吹かざるが故に偏の字が必要とす、晉書「袁山松の傳に、舊歌行路難あり、聽く者流涕せざるは莫し、征戍者の苦を歌ふ曲とす。積裏は即ち沙漠の野營を云ふ。征人三十萬、多數の兵士と見れば可、天山や積裏の巨文字を承けるには三十萬の文字でなければ調和が取れず。一時回首、多數の兵士が此の笛聲の爲め情を動かされたるなり、曲が行路難なれば一層痛切なり。月中看、笛聲は河處より來るぞと月に據つて之を看るなり、看の字を望郷と爲して注する如きは誤まれりと謂ふべし。

【評論】 此の篇、絶句三昧として又是れ神品と謂つ可し。明の于鱗が詩に、天山雪後北風寒し、琵琶を抱き得て馬上に彈ず、曲罷んで知らず青海の月、徘徊猶ほ漢宮の看を作す。我邦の太宰春臺は之を評して偷語鈍賊と爲す。于鱗の鈍賊眞に笑ふに堪へたり。

楊柳枝詞

劉禹錫

楊帝行宮汴水濱、數株楊柳不勝春。晚來風起花如雪、飛入宮牆不見人。 楊帝行宮汴水の濱、數株の楊柳春に勝へず、晚來風起りて花雪の如く、飛んで宮牆に入りて人を見ず、

【句釋】 楊柳枝詞は唐代樂府題なり、柳を詠じて隋宮を弔するものと見て可なり、日本で言へば三絃に合して調子の取れるものを詞と言ふ、此の詩の如き青樓の女が歌ひしものと爲す。楊帝行宮、天子行幸して在る所を行宮と云ふ。汴水濱、汴河曲の詩に於て辨せり。數株楊柳不勝春、楊柳の春に勝へざる状を見ては、人は情に勝へずと言ふことになる。晚來風起花如雪、柳絮が雪の如きなり。飛入宮牆不見人、楊帝在世の時は柳絮の飛ぶを見て、權笑せしものありしならんも、今日は賞觀する人も無し。

【評論】 此の篇、懷古の詞として普通に屬し何等特調あるにあらず、但唐詩として宋元人の及ばざるを知るのみ。



與歌者何戡

二十餘年別帝京。重聞天樂不勝情。舊人唯有何戡在。更與殷勤唱渭城。  
二十餘年帝京に別れ、重ねて天樂を聞いて情に勝へず、舊人唯何戡が在る有り、更に與に殷勤に渭城を唱ふ、

【句釋】 與は「アタヘル」なり。歌者は樂人なり、歌妓にはあらず。何戡、何は姓、戡は名、戡の字訓は「キル」「カツ」音は「ジン」又「カン」今「カン」の音を取る。二十餘年別帝京、二十年前に何戡の樂を奏せしを劉が帝京に在りて聞きしなり。重聞天樂、再度聞くが故に重と言ふ、何戡が妙技を賞して天樂と言ふ。不勝情、俗語で言へば「ドウモ情ニタマラン」と云ふ事。舊人唯有何戡在、二十年を経過せし間に人多く銷亡して、唯獨何戡が在るのみ。夏與は「サラニタメニ」我が與に。殷勤は丁寧。唱渭城、二十年前離別の時奏せし歌を又今日我に聞かす、我は益す情に勝へざるなり。

【評論】 此の篇、王朝川が渭城の句を用ひて以て懷舊の情を叙す。蔣春甫曰く若干言情。

浪淘沙詞

鸚鵡洲頭浪颭沙。青樓春望日將斜。銜泥燕子爭歸舍。獨自狂夫不憶家。  
鸚鵡洲頭浪沙を颭す、青樓春望日將に斜ならんとす、泥を銜む燕子争うて舍に歸す、獨自狂夫家を憶はず、

【句釋】 浪淘沙詞は樂府題なり、婦が夫を憶ふこと、浪の沙を淘がす如くなるを云ふ、一時も止まず其の切なるを言ふ、詞は詩と異なり、俗に遠ざからずして、又雅に近きを要す、詩の全く俗を離るゝとは異なる、命意陳腐なる者は詞にあらざるなり。鸚鵡洲は湖北の武昌府に在り。頭浪颭沙、颭は音「セン」訓は「ナミタツ」「ウゴク」なり、浪が沙を振動するなり。青樓より春望日將斜、浪の沙を動かす状を青樓上より之を望み日の斜に及ぶ。銜泥燕子爭歸舍、微物燕子すら夕暮には舍に歸り雙棲する。獨自は二字で「ヒトリ」なり。狂夫、「詩經」に祈柳攀圃、狂夫瞿瞿と、「漢書」晁錯傳に狂夫の言にして明主擇ぶとあり。不憶家、家に歸ることを忘るゝ様な夫は狂にあらずして何ぞ。【評論】 此の篇、婦が夫を憶ふ情を叙す、同じく閨中の情を賦しても王龍標に至りては狂夫の如き字を用ひずして清婉に語を發す、賓客の才、龍標に及ばざる所。鍾伯敬曰く景に觸れ情を含む、幽恨寫し難し。



自朗州至京戲贈看花諸君子

紫陌紅塵拂面來。無人不道看花回。玄都觀裏桃千樹。盡是劉郎去後栽。  
紫陌の紅塵面を拂うて來る、人の花を見て回ると道はざるは無し、玄都觀裏  
桃千樹、盡な是れ劉郎去つて後栽う、

【句釋】朗州は「唐書地理志」播州播川郡本朗州と、即ち今の湖南省常德府とす。至京、長安、陝西の西安なり。紫陌紅塵、紫と紅は汚なきものを美化す。拂面來、長安市上の風多きこと知るべし。無人不道看花回、題目に所謂諸君子、逢ふ人盡な花を見て回りしと云ふ。玄都觀は平たく言へば上野公園とか、山王臺とか云ふ類なり、仙人の廟を「觀」と名く、佛を「寺」と云ふが如し、此の觀は西安府城内の崇業坊に在り、正元二十一年、禹錫、屯田員外郎と爲る、時に此の觀に、未だ桃花あらず、是の歳王叔文が黨に坐して朗州の司馬に貶せらる、居十年、宰相、其の才を憐み、召して京師に至る、人人皆言ふ道士あり手に仙桃を植て觀に滿ち紅霞の如しと、遂に此の詩を賦す。桃千樹、正面は桃を言ふが、側面は桃にはあらず、「クダラヌ」役人輩が己より後、朝廷に滿つと言ふなり。盡是、一人も己れの先輩は在らず。劉郎は自分を譬ふ、姓も劉氏なればなり。去後栽、桃は己去つて後の物、人は己去つて後の人。

【評論】此の篇、偶ま不平を漏らして俗輩を嘲ける、俗輩は以て輕薄と爲す、此の詩の出るや、又黜けらる、後十年召して還さる、重ねて此の觀に遊ぶ、蕩然として復一樹無し、唯、兔葵燕麥、春風に動搖するのみ、因て再び題して曰く「百畝庭中半は是れ苦、桃花淨盡して菜花開く、桃を種うる道士何れの處に歸る、前度の劉郎今又來る。」益す人の爲めに嫌はれたりと。敖子發曰く、時事を風刺す、全く此の體を用ふ。鍾伯敬曰く、叙し得て清爽。此の清爽は愚俗には嫌はるゝものなり。

涼州詞

張籍

鳳林關裏水東流。白草黃榆六十秋。邊將皆承主恩澤。無人解道取涼州。

鳳林關裏水東に流る、白草黃榆六十秋、邊將皆主の恩澤を承く、人の涼州を取

取ることを解道する無し、

【略傳】張籍、字は文昌、蘇州の人、貞元十五年及第、官、太祝秘書郎、國子博士、水部員外郎、國子司業を歴、晩年、失明し卒す、集七卷あり。

【句釋】涼州詞は前に出せり。鳳林關は臨洮府蘭縣黃河の側に在り、一統志今日の陝西と甘肅との界に當る。裏水東流、黃河の水東流するなり。白草黃榆は胡地の景狀。六十秋、六十年來漢土の地が胡の領地と爲る。邊將は胡將を言ふにあらず。邊地へ赴きし漢の將を言ふ。皆承主恩澤、漢主の



恩澤を承け乍ら、漢主の爲め其の領土を奪ひ返す力を盡さない。無人解道取涼州、涼州は漢地なれば吐蕃の領地と爲し置く道理無し、此の道理を解道即ち知りて道ふ者一人も無し。  
【評論】 此の篇、漢將の威力無きを慨して作るもの、本集に二首あり、今其の一首を載す、「涼州詞」として王翰の葡萄美酒詩と相伯仲して其の絶品を争ふに足る、此の詩の妙を元明の諸家が嘆せざるは解すべからざることなり、余は千古の絶調と爲す。

十五夜望月

王建

中庭地白樹棲鴉。冷露無聲濕桂花。今夜月明人盡望。不知秋思在誰家。  
中庭地白うして樹鴉を棲ましむ、冷露聲無く桂花を濕ほす、今夜月明人盡く望む、知らず秋思誰が家に在らん、

【略傳】 王建、字は仲初、潁川の人、大歴十年の進士、大和中陝州の司馬と爲る、韓愈張籍と同時にして尤相友善す、工に樂府歌行を爲る、思遠く格幽なり、集十卷あり。

【句釋】 十五夜、單に十五夜とあるは八月に限る。中庭は即ち庭中。地白樹棲鴉、鴉已に宿棲、夜深なればなり。冷露無聲、露の下りし時を知らず。濕桂花、中秋なれば桂樹より外有るべからず。今夜月明人盡望、中秋觀月は起源は知り難きも漢代ならんと思ふ。不知秋思、秋に感ずる所の思想

を懐く者は。在誰家、多人の中で何人が秋思が深きや、恐くは我に如く者は無からん。

【評論】 此の篇、千古の名篇として人口に膾炙する者、樹に鴉の棲むを見るは月明なればなり、露に聲無きは聲あるかと疑ふを以てなり、奇想警句、決して多得すべからざる詩とす。

送盧起居

武元衡

相如擁傳有光輝。何事闌干淚濕衣。舊府東山餘妓在。重將歌舞送君歸。  
相如傳を擁して光輝あり、何事を闌干として涙衣を濕ほさん、舊府東山餘妓在り、重ねて歌舞を將て君が歸るを送らん、

【略傳】 武元衡、字は伯蒼、河南の人、建中四年の進士、元和二年、門下侍郎平章事を以て政を乗る、早朝し、盜に暗中より射殺せらる、臨淮集十卷あり。

【句釋】 盧は姓。起居は官名、起居舍人、中書省に屬す、起居郎は門下省に屬す、天子命あるときは階に臨み、俯して聽き之を書し以て起居注と爲す。相如は漢の司馬相如を云ふ、漢の武帝の時、邛笮の君長、南夷漢と通ずと聞いて、吏に請うて南夷に比せんとす、乃ち司馬相如を拜して中郎將と爲し、傳を馳せて蜀に至る、太守以下郊迎し、縣令弩矢を負うて先驅す、蜀人之て寵と爲す、相如は蜀人なればなり。擁傳有光輝、相如を引いて以て盧が起居舍人の時代を言ふ。何事闌干、涙の



流るゝ形容を闌干と云ふ。涙濕衣、錦衣郷に使用するに何事ぞ涙を流すやと慰さむ。舊府は故郷を云ふ。東山餘妓在、晉の謝安石、情を丘壑に放ち游賞毎に必ず妓女を以て従ふ、後朝任を受くと雖も然も東山の志始めより未だ嘗て渝らず、今も東山に餘妓の在る有るに依つて、重將歌舞送君歸、此の餘妓に歌舞を爲さしめ、君が歸るを壯んに送らん。

【評論】此の篇、盧を以て相如と安石とに譬を取る、盧を尊崇したること知るべし。唐汝詢は官を罷めて歸ると。一二の句に據つて之を觀れば、罷官にはあらず、大命を奉じて使用するものゝ如し。精讀する者は、其の眞を知らん。

嘉陵驛

悠悠風旆遠山川。山驛空濛雨作煙。路半嘉陵頭已白。蜀門西更上青天。  
悠悠たる風旆山川を遠る、山驛空濛として雨煙と作る、路嘉陵に半にして頭已に白し、蜀門の西更に青天に上る、

【句釋】嘉陵驛は四川省保寧府廣元縣の西二十里に在り、陝西の漢中府へ通ずる道とす、元和二年元衡、平章事を以て劍南西川の節度使に充つ、此れ蜀に入る時の作。悠悠風旆「ハタ」の風に翻る形容を悠悠と云ふ、旆旆は鳥羽を以て作る。遠山川、蜀は平地無く、山川即ち路なり。山驛空濛雨

作煙、山邊の驛路が煙の如き細雨にて、ボンヤリする。路半嘉陵、陝西の西安府と四川の成都府との中間は嘉陵なればなり。頭已白、白髪が生ずる程の辛苦を経。蜀門西更上青天、地理が益す高峻にして青天に上るが如し。

【評論】此の篇、蜀道の難を叙するものなり。鍾伯敬曰く景に即いて亦悲、事に就いて亦苦。

漢苑行

張仲素

回雁高飛太液池。新花低發上林枝。年光到處皆堪賞。春色人間總未知。  
回雁高飛す太液池、新花低發す上林の枝、年光到處皆賞するに堪へたり、春色人間總て未だ知らず、

【略傳】張仲素、字は繪之、元和中翰林學士と爲る。

【句釋】漢苑行、上林苑の事を咏す。回雁高飛太液池、建昌宮北に大池漸臺を治す、高さ二十餘丈名けて太液池と曰ふ、中に蓬萊、方丈、瀛洲、壺梁あり、海中の神山に象どる。封禪書 新花低發上林枝、上林苑中の花が下の枝まで開く。年光到處皆堪賞、上林苑中の春光は到處皆賞觀に價する、然るに、春色人間總未知、宮禁中の物、何人も隨意に看ることは能はざるを云ふ。

【評論】此の篇、諷意有るものゝ如し、一人の娛樂は、王者の爲すべきものにあらず、衆と共に樂し



むべしとの意に見て可なり、年光と春色とは合掌なりと唐汝詢諤る、或は然らん、年光を改むるか、春色を改むるか、二者の中を動かさざるを得ず。

塞下曲

三戌漁陽再度遼。驛弓在臂箭橫腰。匈奴似欲知名姓。休傍陰山更射鵞。  
三たび漁陽を成り再び遼を度る、驛弓臂に在り箭腰に横たはる、匈奴名姓を知らんと欲するに似たり、陰山に傍うて更に鵞を射ることを休めよ、

【句釋】塞下曲は前に辨せり。三戌漁陽、西漢は縣漁陽郡、東漢は郡幽州、唐は河北道薊州、今日の直隸省順天府密雲縣西南三十里。再度遼、遼水を度る、秦は幽州を以て遼西郡と爲す、今の遼東是れなり、漢の宣帝の時、烏桓反す、范明を以て度遼將軍と爲し、遼水を度り之を撃つべきを命ず、故に以て官號と爲す。驛弓、驛驛たる角弓、驛驛は弓の調和する貌。在臂箭橫腰、正に是れ強矯の態度。匈奴似欲知名姓、三戌再度を以て匈奴が頗る此の將軍に著目して其の名姓を知らんと欲する者の如し。休傍陰山更射鵞、射鵞の妙伎を彼の匈奴に觀せしめるに至りては、匈奴は益す此の將軍を窺うて用心する虞あるに依つて、決して陰山に傍うて鵞を射ることはならぬ。

其二

朔雪飄飄開雁門。平沙歷亂捲蓬根。功名恥計擒生數。直斬樓蘭報國恩。

朔雪飄飄として雁門開く、平沙歷亂として蓬根を捲く、功名恥づらくは擒生數を計ることを、直ちに樓蘭を斬つて國恩を報ぜん、

【句釋】朔雪は北雪なり。飄飄は飛散を形容す。開雁門、雁門關は太原府代州の北に在り、是れ天の景。平沙歷亂捲蓬根、平沙が風の爲めに歷亂として、蓬は蒿、草の名、「ヨモギ」其の根を捲く、風の字無くして自ら風を見る、是れ地の景。功名を顯はして、恥計擒生數、何人を生擒しても雜兵などは功名とならざるなり、故に恥づ。直斬樓蘭、兵卒など百人千人擒ふるも何の詮なし、直ちに大將の樓蘭王を斬つて以て功名とせん。報國恩、漢主の憂ふる根本は、樓蘭に在る、故に此の樓蘭を斬れば、漢主の憂は除く、我が恩に報ふるは是れなり。

【評論】此の二篇、唐人として至る者にはあらざるが、雄偉の氣象文字外に顯然たり。鍾伯敬曰く猛氣橫飛し、剛風畢く露る、武辨の氣象、當に此の如く雄壯なるべし、凡そ此の詩を作る者、若し激卓を缺かば便ち名筆にあらず、作者宜しく此の二首を學ぶべし。本集に三首あり、二を采る。

秋閨思

碧窗斜月藹深輝。愁聽寒蟬淚濕衣。夢裏分明見關塞。不知何路向金微。



碧窗の斜月深輝藹たり、寒蟬を愁へ聽いて涙衣を濕ほす、夢裏分明に關塞を  
見る、知らず何れの路か金微に向はん、

【句釋】 秋閨思は、樂府題にて、家を守る婦の情を叙す。碧窗、碧紗の窗。斜月、藹深輝、窗中より  
見る所の月なれば、深輝藹たりと云ふ。愁聽寒蟬、寒蟬の屬、俗に「ヒグラシゼミ」。涙濕衣、夜半  
にヒグラシが啼くは妙なる事なるが或は蟬の誤にもあらん。夢裏分明見關塞、思うて止まざるが  
故、遂に夢中、夫の征行せる關塞を見るに至る。不知何路向金微、塞外に金微と云ふ山がある、振  
武軍に隸す、此に至る路は分明ならず、遂に夢なればなり。

【評論】 此の篇、唐絶として尋常一様の作に屬し別に奇巧あるにあらず。胡元瑞曰く江寧船、王昌の  
後、張仲素其の遺響を得、秋閨塞下の諸曲俱に工。細かに此の詩を案するに一二の句未だ眠に就か  
ず、而して第三句直ちに夢を言ふ、一氣ならざる所、拙に近し、工にはあらず、余は元瑞の説を取  
らず。

郡中即事

羊士諤

紅衣落盡暗香殘。葉上秋光白露寒。越女含情已無限。莫教長袖倚闌干。  
紅衣落ち盡きて暗香残り、葉上の秋光白露寒し、越女の含情已に限り無し、

長袖をして闌干に倚らしむること莫れ、

【略傳】 羊士諤は、泰山の人、貞元の初、進士と爲る、監察御史に拜す、性傾險、宰相を誣論する  
に坐し、出でて資州の刺史と爲る、集二卷あり。

【句釋】 郡中即事、是れ資州刺史たる時の作。紅衣は蓮花なり。落盡暗香殘、花は無きも多少の香  
氣は残すとなり、梅花にあらざるも暗香を用ふること知るべし。葉上、蓮葉なり。秋光白露寒、暗  
香は鼻觀なり、白露は眼觀なり。越女、資州は古の越なり。含情已無限、婦女の何事を爲すにも表  
情を装ふは世界の共通なりと見ゆ。莫教長袖倚闌干、采蓮の女限り無く多し、然れども池中はまだ  
可なり、闌干に倚らしめては不可なり、我をして愁情を起さしむる因と爲る、長袖は越女を云ふ。  
【評論】 此の篇、郡中即事とあるが、采蓮曲と改むるを可とす、蓮と越女との關係に聊か其の味を  
存するのみ。

登樓

槐柳蕭疎遠郡城。夜添山雨作江聲。秋風南陌無車馬。獨上高樓故國情。  
槐柳蕭疎として郡城を遠る、夜山雨を添へて江聲と作る、秋風南陌車馬無く、  
獨高樓に上る故國の情、



【句釋】 登樓、樓上より即景即情を叙す、槐柳、槐と柳と。蕭疎は「サビシ」。遼郡城、資州郡城なり。夜添、昨夜なりや今夜なりや分明ならず、恐らくは今夜ならん。山雨作江聲、雨が來りし故に水聲が激しくなりたるを言ふ。秋風南陌無車馬、往問者が來らざるを言ふ。獨上高樓故國情、樓に登るも話し相手なく故國を懷ふより外は無し。

【評論】 此の篇、即景即情のみ、忽ち夜、忽ち山雨、忽ち秋風、重語厭ふべし。

酬浩初上人欲登仙人山見貽

柳宗元

珠樹玲瓏隔翠微、病來方外事多違。仙山不屬分符客、一任凌空錫杖飛。  
珠樹玲瓏として翠微を隔つ、病來方外事多く違ふ、仙山屬せず分符の客に、一任す空を凌ぐ錫杖の飛ぶに、

【句釋】 酬は返禮と言ふ意味。浩初上人、僧に對する敬稱語を上人と云ふ。仙人山は柳州武宣縣の西四十里に在り、石あり形仙人の如し。見貽は、上人より詩を貽られたり、依つて此の詩を賦して答禮す。珠樹と云ふ樹木は有るにあらず、仙人や佛經には人間世界と違ふ樹があるなり。玲瓏、珠なるが故に玲瓏なり、「スキトホル」事なり。隔翠微、普通の山を翠微と云ふ、此の山を隔てて珠樹が有るなり。病來は柳宗元が自身を云ふ。方外は儒流より佛教徒や道士に對して云ふ語、儒は方内に遊び、佛教徒や道士は方外に遊ぶと爲す、世内や世外と殆んど同意味なり。事多違、方外の人

事が違ふと言ふにはあらず、上人の如き方外の人に隨つて病身は遊ぶ能はず、遊ばんと欲するも意の如くならざるを云ふ。仙山不屬分符客、官吏は朝廷より銅符や竹符を受けて以て其の證とす、然るに仙人山は此の如き俗吏の遊ぶには受け付け呉れぬ、柄に無いと云ふ意味。一任は「マカス」なり。凌空錫杖飛、神僧は錫を飛ばし空を凌ぐ、人間の如く地行のものにあらず、今上人が仙人山に遊ぶは良に分相應の遊び、俗吏なぞとは異なること云ふ意味なり。

【評論】 此の篇、浩初に和して作るもの、詩境亦玲瓏として一塵滓無し、千古の名篇として誰か之を推さざらん。唐汝詢曰く、語は峻、調は雄、盛唐の格と。眞に然り、佛家に關する詩、此等を學ばざるべからず。

題延平劍潭

歐陽詹

想像精靈欲見難、通津一去水漫漫。空餘千載凌霜色、長與澄潭白日寒。  
精靈を想像して見んと欲すれども難し、通津一去水漫漫、空しく千載霜を凌ぐ色を餘して、長く澄潭と白日に寒し、

【略傳】 歐陽詹、字は行周、泉州の人、進士に擧られ韓愈李絳等と第を聯ぬ、皆天下の選、時に龍



虎榜と稱す、閩人進士に第す、歐より始まる、父母に事へて孝、朋友と信、其の文章深切復明辯、四門助教に終る、卒する年四十餘、集十卷あり。

【句釋】延平劍潭は、閩の延平府南平縣城東に在り、今日の福建省なり、建寧と邵武の二水合流の所、晉の雷煥二劍を豐城に得、一を以て張華に與へ、一を留めて自ら佩ぶ、華死して其の劍の所在を失す、其の後、煥が子、劍を佩び、延平津を渡る、劍忽ち腰より躍出して水に墮つ、但兩龍各長さ數丈なるを見る、因て劍津又劍潭と名く。想像精靈、歐が此を過ぐるに依つて不思議の事を想像する、而かも欲見難、劍も龍も今日は見難し。通津一去、津に至りたるを去と云ふ。水漫漫、水空しく闊し。空餘千載凌霜色、劍が霜の如き色。長與澄潭、千歳なるが故に長し、劍潭の有らん限り、白日寒、劍氣寒く、人膽寒く、白日も亦寒きなり、精靈の二字より悉く他の文字を出す。

【評論】此の篇、劍の淪没を惜み、以て劍の精靈を想像す、詹が世の爲め用ひられず自ら其の才を惜むかと、古人評せり。鍾伯敬曰く二語神雋。

聞白樂天左降江州司馬

元稹

殘燈無焰影幢幢。此夕聞君謫九江。垂死病中驚坐起。暗風吹雨入寒窗。

起す、暗風雨を吹いて寒窗に入る、

【略傳】

元稹、字は微之、河南の人、太和の間、尙書右丞と爲て卒す。元氏長慶集百卷あり。

【句釋】

白樂天、名は居易、樂天は字なり、其の先太原の人、後華州の下邳に徙る、貞元十四年進士と爲る、元和對策して翰林學士と爲る、事につて江州司馬に貶せらる、會昌の初、刑部尙書を

以て致仕して卒す、元稹と友善、相唱和す、世に元白體と號す。江州司馬は即ち知縣なり。殘燈無焰、蠟燭の火已に滅せんとする。影幢幢、光の明ならざるを幢幢と云ふ。此夕聞君謫九江、遷謫せらるゝを聞く、江州の潯陽郡、本の九江郡なり、有名な琵琶行は此の時成りしものなり。垂死病中、元稹も非常に重き病に臥して居りしなり。驚坐起、褥を蹶つて起ちしなり、病人ゆゑ蹶る勇氣は無し、驚駭の餘り起坐せしものか。暗風吹雨入寒窗、健全の身すら雨窗に入るに耐へず、況んや病者に於てをや。

【評論】

此の篇、元稹絶句中の最上乘なるもの、樂天が此の詩を得て云ふ、他人尙聞可らず、

況んや僕をや。蔣春甫曰く悲惋。黃家鼎曰く、唐人の交道最も古、休戚に同じかるべし、死生を托すべし、此の詩を誦し、元白の交情見る可し。吳吳山曰く、一の驚字、多少の痛惜感憤に抵る。洪容齋曰く、夫れ嬉笑の怒、裂皆より甚だしく、長歌の悲、慟哭に過ぐ。此の語誠に然り、此の選一本樂天の詩を載す、余が講ずる本之れ無し、樂天も此に至るもの極めて寥寥、皆無と謂つても可なり。



胡渭州

張祐

亭亭孤月照行舟。寂寂長江萬里流。鄉國不知何處是。雲山漫漫使人愁。  
亭亭たる孤月行舟を照す、寂寂たる長江萬里流る、鄉國知らず何れの處か是なる、雲山漫漫人をして愁へしむ、

【句釋】 胡渭州は商調曲、蓋嘉運が進むる所、邊戎行旅の懷を述ぶ、題と全く干渉無し。亭亭は高き貌。孤月照行舟、作者が舟にて旅行するなり。寂寂は「シヅカ」なり。長江萬里流、前路の長き知るべし。鄉國不知何處是、鄉國遠きに在り、何ぞ知るべけん。雲山漫漫使人愁、漫漫は平仄兩用、今の句長途の形容を取る。

【評論】 此の篇、崔顥の日暮鄉關何れの處か是なる、煙波江上人をして愁へしむの句を套襲せるを以て、古今鈍賊と爲す、此の選中より除去すべしと唐汝詢論せり、或は然らん。

雨淋鈴

雨淋鈴夜却歸秦。猶是張徽一曲新。長說上皇垂淚教。月明南內更無人。  
雨淋鈴の夜却て秦に歸る、猶是れ張徽一曲新なり、長く説く上皇涙を垂れて

教へしとき、月明にして南内更に人無し、

【句釋】 雨淋鈴は玄宗が製する所の曲名。雨淋鈴夜、是れは眞の雨を云ふ、玄宗蜀に出奔し、南狹斜谷に入る、霖雨旬に彌るに屬ふ、棧道の中に於て、鈴聲雨と相應するを聞く、玄宗已に貴妃を悼む、因て其の聲を採り雨淋鈴の曲と爲す。却歸秦、玄宗が蜀より本の長安に歸るを云ふ。猶是張徽一曲新、玄宗が淋鈴曲を作り以て恨を寄す、時に樂工張徽なる者醫策を善くすと聞き、之を召して其の曲を授く、此の句是を言ふ。長說上皇、玄宗は上皇なり、肅宗が今帝なればなり。垂淚教、貴妃を悼んで作りし曲なるが故、教ふる時、亦涙を垂れしなり。月明南内更無人、至徳中復、華清宮に幸す、從官嬪御、皆舊人にあらず、玄宗、望京樓に於て張徽をして此の曲を奏せしむ、覺えず悽愴涕を流す、其の曲、後法部に入る、南内は興慶宮を云ふ、弔者より之を言へば今は玄宗も貴妃も無し、唯月明あるのみ、一説下の如し、興慶宮は皇城の東南に在り、玄宗、太上皇と爲つて嘗て之に居る、此の詩言ふ玄宗蜀に入る時霖雨に逢うて懷を傷むと、其の却て歸秦に及んで蓋し亦時に夜雨に逢ふ、淋零悲しむべし、乃ち其の聲を寫して張徽の曲に入る、一奏する毎に蒙塵辛艱の懷更に復凄然たり、故に猶と曰ひ、新と曰ふ、三四、徽言ふ上皇の我に斯曲を教へしとき、悲愴流涕百感に勝へず、爾の時南内淒涼唯月明あり、這の一段、後來の哀話と成るに堪ふ、故に長説と曰ふ、尙一説あるも録せず。



【評論】 此篇、雨淋鈴の事は明白なり、全首としての意明白ならず、後賢の批判を俟つのみ。

虢夫人

虢國夫人承主恩。平明騎馬入宮門。却嫌脂粉汗顏色。淡掃蛾眉朝至尊。虢國の夫人主恩を承け、平明馬に騎りて宮門に入る、却て嫌ふ脂粉の顏色を汗すを、淡く蛾眉を掃うて至尊に朝す、

【句釋】 虢夫人、楊貴妃に三姨あり、韓國、秦國、虢國の三夫人なり、皆朝に出入し、恩を承く、姨は「ヲバ」ナリ。虢國夫人承主恩、玄宗の恩寵を承くる。平明は早曉なり。騎馬入宮門、明皇雜録」と稱する本に虢國常に驄馬に乗りて禁に入るとあり。却嫌脂粉汗顏色、婦女は脂粉を装うて美は一層に美を増す、然るに此の夫人は脂粉を用ふれば却て顔色を汗す、乃ち素面の美を覆ふ事なる、之を用ふるを嫌ふ所以「楊妃外傳」に虢國夫人朱粉を施さず自ら美艶あり、素面朝天とあり。淡掃蛾眉、俗に云ふ薄化粧と云ふものをする。朝至尊、玄宗の煩惱之が爲め動くものか。

【評論】 此の篇、直ちに實事を賦して諷刺自から見る。貴妃以て國を亡すに足る、況んや餘黨をや。

渡桑乾

賈島

客舍并州已十霜。歸心日夜憶咸陽。無端更渡桑乾水。却望并州是故鄉。

客舍并州已十霜、歸心日夜憶咸陽、無端更渡桑乾水、却望并州是故郷、

【句釋】 渡桑乾、桑乾河は山西省大同府城南六十里に在り、源は馬邑縣の北、洪濤山下に出で金龍池水と合して東南盧溝河に入る。客舍并州、太原府即ち并州開元十九年に府と爲す。已十霜、十年客寓して并州に在る。歸心日夜憶咸陽、賈島が故郷は咸陽なり、東漢時代は咸陽も并州雲中郡、今の陝西省西安府咸陽縣治なり、并州と咸陽との里數は支那里程七百里餘なり。無端、俗語の「フ」トに當る。更渡桑乾水、并州と桑乾とは二百里餘なり。却望并州、十年も寓住せし地なれば中途に廻看せざるを得ぬ。是故郷、王敬美曰く度桑乾の詩を讀む、謝疊山が注を見る、云ふ、旅寓十年交遊懽愛故郷と異なる無し、一旦別れ去る、豈能く情無からん、桑乾を度りて并州を望み反つて以て故郷と爲す、覺えず失笑す。王が笑たり唐汝詢曰く、此れ浪仙自ら郷を思うて作る、何ぞ曾て并州と情あらん。其の意は久しく并州に客寓して故郷に隔たるを恨む、今唯歸る能はざるのみならず、反つて桑乾を度るに依つて還つて并州を望む、其の「イヤ」と思ひし并州も又是れ故郷なり、并州も且つ住するを得ず、何に況んや咸陽に歸ることを得ん、此れ浪仙が意なり、謝が注分毫相似たるこ



とあるや否や。

【評論】此の篇、浪仙集中に在りて傑出せる作とす、其の詩意は前三家の説の如し、余は唐汝詢の説を以て至當とす、桑乾を渡りて咸陽に歸る中途の作にはあらず、唯桑乾を度りて郷を思ひ作成せしものならん。蔣春甫曰く、遠くして見る可からず、故に憶と曰ふ、近くして見る可し、故に望と曰ふ、妙憶望の二字に在り。譚元春曰く、思郷の情、筆下に抽出す。

成德樂

王表

趙女乘春上畫樓。一聲歌發滿城秋。無端更唱關山曲。不是征人亦淚流。

趙女春に乗じて畫樓に上る、一聲歌發す滿城の秋、端無く更に關山の曲を唱

ふ、是れ征人ならざるも亦淚流る、

【句釋】王表は貞元元和間の人、其の詩多く饗常と唱和す。成德樂は唐樂の説と古樂の説とあり、共に不詳。趙女、趙國の妓女。乘春上畫樓、樂を奏せんと欲して樓に上る。一聲歌發滿城秋、城は庭ならんとの説と、秋は愁ならんとの説とあり。庭愁、共に不可、城秋の二字改むべからず、時は春なれども樂の妙技が秋の氣を發せしむとの意なればなり。無端「フ」更唱關山曲、其の上にも又關山の曲、即ち征夫の事を悲しむ曲を唱ふ。不是征人亦淚流、實際の征人にあらざる者も此の關山

曲の妙樂を聞いては自然に泣かざるを得ずとなり。

【評論】此の篇、趙女に就いて特に其の妙技あるを咏せしなり。蔣春甫曰く、戴叔倫が夜袁江を發する作と、句法絶た似たり、更と不是と亦との字を看よ。

漢宮詞

李商隱

青雀西飛竟未回。君王長在集靈臺。侍臣最有相如渴。不賜金莖露一杯。

青雀西に飛んで竟に未だ回らず、君王は長へに集靈臺に在り、侍臣最も相如

が渴あり、賜はらず金莖の露一杯、

【略傳】李商隱字は義山、懷川の人、文宗の開成二年進士の第に登る、弘農の尉に調せられ、王茂元、掌書記に表して子を以て之に妻す、侍御史に除す、後檢校吏部員外郎と爲り、榮陽に歸る、卒す、樊南甲集二十卷、乙集二十卷あり並に傳ふ、其の文章を爲る、瑰邁奇古、律詩に長す、詠史尤も精、自ら玉溪子と稱す、温庭筠と并稱して温李二家と云ふ、亦西崑體と稱せらる。

【句釋】漢宮詞は漢宮に就いて其の事を叙す。青雀西飛竟未回、「漢武故事」に、七月七日上、乾承殿に齋居す、忽ち青鳥あり西より來つて殿前に集まる、上、東方朔に問ふ、朔曰く此れ西王母、來らんと欲するなり、頃らく有りて王母崑崙より至る、去るに及んで、帝に許すに三年後、復來るこ



とを以てす、而かも竟に來らず。君王長在集靈臺、華陰縣の界に集靈臺あり、王母の復來るを待つて君王は此に在り。侍臣最有相如渴、司馬相如は消渴の病を持つ者なり、熱病の類ならん。不賜金莖露一杯、金莖は銅柱、漢武が此の銅柱に天露を承け玉屑に和して之を飲んで以て仙を求めんと欲す、己は此の如く仙を求め、侍臣は渴しても一杯の露すら賜はらず、情なき事となり。

夜雨寄北

君問歸期未有期。巴山夜雨漲秋池。何當共剪西牕燭。却話巴山夜雨時。  
君歸期を問ふ未だ期あらず、巴山の夜雨秋池に漲る、何か當に共に西牕の燭を剪りて、却て巴山夜雨の時を話すべき。

【句釋】 夜雨寄北、李が東蜀の節度判官たる時の作ならん、内君に寄せしものなり。君問歸期、細

君が書簡を以て歸期を問ひ來るなり。未有期、答辨なり。巴山は任地即ち蜀中の山。夜雨漲秋池、返簡を認める時、夜雨が霏霏として秋池に漲る、極めて情に勝へざる景色なり。何當共剪西牕燭、何かであるから未だ歸期は判らぬが、二人して西牕即ち寢室の燈燭を剪つて、却話巴山夜雨時、君が書簡を以て歸期を問ひし時の寂寥味を話す時ぞや。

寄令狐郎中

嵩雲秦樹久離居。雙鯉迢迢一紙書。休問梁園舊賓客。茂陵秋雨病相如。  
嵩雲秦樹久しく離居す、雙鯉迢迢たり一紙の書、問ふことを休めよ梁園の舊賓客、茂陵の秋雨病相如。

【句釋】 令狐郎中は令狐楚、李が友なり。嵩雲、嵩山の雲、河南省河南府に在り、五嶽の中嶽とす、李が此に居る。秦樹、秦地の樹、陝西省西安府に在り、天下の豪傑十二萬戸を徙住せしめし秦始皇の都、令狐が此に居る。久離居、五百餘里を隔つ。雙鯉、古人の尺素結んで鯉魚の形を爲す、互に



往復するが故に雙なり。迢迢一紙書、會面は能はず、信書を以て遠方を往復す。休問梁園舊賓客、漢の司馬相如は嘗て梁に客游す、今李自ら以て相如に譬ふ。己れの近状を問ふを休めよ。茂陵秋雨病相如、相如は茂陵に家居せるを以て李が今嵩山下の居を譬ふ、我が近状は秋雨に逢うて病んで臥す、善か悪か知れやうぞ。

【評論】此の篇、是れ李が梁に客と爲つて居し時作りしものなり。徐而菴曰く、落句古事を用ひて今事と爲す。于鱗七絶此の句法多し。敖子發曰く、落句相如を以て自況す、死事を用ひて活事と爲す。短衣匹馬李廣に隨ふ、爲に報す惠遠詩惜まされ、但東山の謝安石を用ふ、自保す曾參が人を殺さざるを、誰に憑つて謝玄暉に説與せん、皆此の法。

秋思

許渾

琪樹西風枕簟秋。楚雲湘水憶同游。高歌一曲掩明鏡。昨日少年今白頭。  
琪樹の西風枕簟の秋、楚雲湘水同游を憶ふ、高歌一曲明鏡を掩ふ、昨日は少年今は白頭、

【略傳】許渾、字は用晦、丹陽鎮江府の人、太和六年の進士、太平縣の令と爲る、後監察御史に辟る、睦郢二州の刺史を歴、丁卯集二卷あり。

【句釋】秋思は秋に感じて思を賦す。琪樹は樹色綠翠玉の如きを云ふ、金陵の寶林寺に琪樹ありと。西風は秋風なり。枕簟は竹席ムシロなり。秋楚雲湘水は洞庭湖の邊を云ふ。憶同游、昔人を伴うて遊びし事を憶起する。高歌一曲、昔少年の時を憶うて煩悶を遣る爲め歌ふこと一曲す。掩明鏡、白頭を照さるゝを嫌うて鏡に向はず。昨日少年今白頭、塵網に勞勞して自ら其の衰を覺えざるなり。

【評論】此の篇、許渾の詩として上乘なるものにあらず、丁卯の工力は七律に在りて七絶にあらざる、此の選、絶を采りて律を采らざるは何ぞや、晋の阮籍が詩に、朝に媚少年爲るも、夕暮に醜老と成る。此の詩是に由る。

經汾陽舊宅

趙嘏

門前不改舊山河。破虜曾經馬伏波。今日獨經歌舞地。古槐疎冷夕陽多。  
門前改めず舊山河、虜を破りて曾て輕んず馬伏波、今日獨歌舞の地を經れば、古槐疎冷にして夕陽多し、

【略傳】趙嘏、字は承祐、山陽の人、會昌三年の進士、大中の間、仕へて渭南の尉に至る、渭南集三卷又編年詩二卷あり。



【句釋】 經汾陽舊宅、郭汾陽、字は子儀、華州鄭の人、長七尺二寸、武を以て身を起し、天寶八年より、軍に従事し、祿山を破り、吐蕃を破り、大功を立つ、年八十五を以て死す、李光弼と二忠臣と稱せらる、其の舊宅は親仁里に在り、其の里、四分の一に居り、中に永巷を通ず。門前不改舊山河、郭が家の門前の山河は依然として形状を改めず、即ち唐の山河なり。破虜會輕馬伏波、漢の馬援は賊を征して功あり、伏波將軍と爲る、子儀、安史吐蕃の亂を平定し唐室を再造す、伏波比するに足らず。今日、作者が、獨經歌舞地、汾陽が生前兒孫等と歌舞せし舊宅を経て見れば、何ぞ料らん、古槐疎冷、エンジュがマバラにして、夕陽多、舊宅を夕陽が照すは即ち樹の荒涼疎冷なるが故なり、德宗が國の功臣を待遇せざるを悲しむなり。

【評論】 此の篇、唐絶の上乗、盛唐の格とは聊か異なるが、中唐の調として實に神品に入る、人臣たる者、此の詩を讀まば感慨を催すべく、人君たる者、此の詩を讀まば正に哀憫を催すべし。

江樓書感

獨上江樓思渺然。月光如水水連天。同來翫月人何處。風景依稀似去年。  
獨江樓に上れば思渺然、月光水の如く水天に連なる、同じく來つて月を翫せし人何れの處ぞ、風景は依稀として去年に似たり、

【句釋】 江樓書感、去年友人と同じく登りし樓に今日は獨登りて感慨を催すなり。獨上江樓思渺然、思が種種の事に涉るが故に渺然なり。月光如水、月の清澄を水に譬ふ。水連天、水色と天色と同一様なるを云ふ。同來、去年來りし友、獨上の反對なり、翫は賞翫なり。月人何處、友人は何處に今在るを知らず。風景依稀、依稀は依然と同じ。似去年、字の如し。

楊柳枝

溫庭筠

館娃宮外鄴城西。遠映征帆近拂堤。繫得王孫歸意切。不關春草綠萋萋。  
館娃宮外鄴城の西、遠くは征帆に映じ近くは堤を拂ふ、王孫歸意の切なるを繫ぎ得て、春草の綠萋萋たるに關せず、

【略傳】 溫庭筠、字は飛卿、并州の祈の人、少うして敏悟、工に辭章を爲る、李商隱と并稱せらる、然れども行に薄うして、多く側詞艷曲を作る、數舉して第せず、大中の末、上書して方山の尉を授かる、詩五卷あり。

【句釋】 楊柳枝は、蔣春甫の曰く、即ち古の折楊柳枝の義なり、白居易、愛妓小蠻あり、善舞す、



乃ち楊柳枝の詞を作り、以て意を託す、此れ自ら是れ白氏楊柳枝の爲めにして作る、今人混じて一題と爲す、謬ること甚し、館娃宮は靈巖山上に在り、前は姑蘇臺に臨む、吳人美女を謂て娃と爲す、蓋し西施を以て名を得、吳王夫差の築きしもの。鄴城は魏の曹操の立しもの、宮外も城西も共に柳樹を多く植う。遠映征帆、是れは館娃宮外の方。近拂堤、是れは鄴城西の方。繫得王孫歸意切、王孫は故郷へ歸らんと欲する意急なりと雖も、柳枝が之を繋ぎ止めて歸る能はざらむ、柳を以て女に譬ふるなり。不關春草綠萋萋、古人は春草を見て王孫を思ふと言ひしが、我は謂ふ王孫の歸意を添へる者は柳に在て春草に在らず、『楚辭』に反對の語を爲すなり、王孫草と云ふ草あり、一名を不歸草と云ふ、此の詩の王孫は其の意味を用ふるが、而かも眞の王孫即ち人にして草にはあらずと知れ。

【評論】此の篇、温が得意の筆墨にて、行に薄しと言はるゝ所以のものなり、然れども雄偉壯烈のみ詩にはあらず、情の發する所、志の赴く所、悉く詩ならざるは無し、一概に排すべからず。鍾伯敬曰く、王孫春草の字用ひ得て媚。黃家鼎曰く春草を推開して楊柳の爲に門戸を立つ。

折楊柳

段成式

枝枝交影鎖長門。嫩色曾霑雨露恩。鳳輦不來春欲盡。空留鶯語到黃昏。

枝枝影を交へて長門を鎖す、嫩色曾て霑す雨露の恩、鳳輦來らず春盡さんと欲す、空しく鶯語を留めて黃昏に到る、

【略傳】段成式、字は柯古、會昌の時の人、博學強記、奇篇祕籍多し、酉陽雜俎を著はす、官太常少卿に終ふ。

【句釋】折楊柳は漢の李延年横吹三十八曲中の一なり、宮中の事を奏する曲とす。枝枝交影鎖長門、失寵者の退いて住する宮を長門と名く、柳の枝が其の長門を鎖す、嫩色は新葉なり、以て宮女の妙齡なるに譬ふ。曾霑雨露恩、宮女が少うして天子の寵を受けし事、柳の新葉が雨露に霑はさるゝと同一なり。鳳輦不來春欲盡、天子が長門へは幸せざるに早春は盡きんとする。空留鶯語到黃昏、春も盡きんと欲し、日も將に暮れんとす、鶯語のみ關關と柳を繞る、天子は來らず、人も亦無し、却て鶯語を恨むのみ。

【評論】此の篇、柳に託して宮女の怨を言ふ、句句清妙、宋人の有らざる所なり。蔣春甫曰く、首の二句少年曾て恩寵を承けしを託諭し、鳳輦來らず、空しく鶯語を留む、隱然として孤處寂莫人の共に之を訴ふる無きの意を見る、春盡と曰ひ、黃昏と曰ひ、又隱然として老の將に至らんとするを見る。鍾伯敬曰く、怨んで激せず、大に是れ宮體。



宮怨

司馬禮

柳色參差掩畫樓。曉鶯啼送滿宮愁。年年花落無人見。空逐春泉出御溝。  
柳色參差として畫樓を掩ふ、曉鶯啼き送る滿宮の愁、年年花落ちて人の見る  
無く、空しく春泉を逐うて御溝を出づ、

【略傳】 司馬禮は大中の時の人、詩に工、時に稱して先輩と爲す。

【句釋】 宮怨は宮詞と殆んど同じ、宮女の怨を叙す。柳色參差掩畫樓、春を装うて無情のものは柳とす。曉鶯啼送滿宮愁、春を装うて有情のものは鶯なり。年年花落無人見、一人見るのみで、他人は決して見ざるなり、一人とは誰ぞ、失寵者を云ふ。空逐春泉出御溝、花は誰も知らぬ間に空しく御溝を出づ、人は誰も知らぬ中に衰色となる。

【評論】 此の篇、宮怨として普通の作に屬す。蔣春甫曰く、李建勳が詩に、却て羨む落花春管せず、御溝流れ得て人間に到る、今「空逐」は「却羨」に勝ると。蔣評洵に然り。

宴邊將

張喬

一曲涼州金石清。邊風蕭颯動江城。坐中有老沙場客。橫笛休吹塞上聲。

一曲の涼州金石清し、邊風蕭颯として江城を動かす、坐中沙場に老いたる客あり、橫笛吹くを休めよ塞上の聲

【略傳】 張喬は池州の人、昭宗大順の進士、黃巢が亂に九華に隱る、集三卷あり。

【句釋】 宴邊將、邊地に將として留まりし將軍を饗應して其の慰勞の宴を開くなり。一曲涼州、樂に涼州曲あり、邊地の風俗を歌ふ。金石清、歌聲の佳なるを云ふ。邊風蕭颯動江城、歌ふ邊地の歌が蕭颯として江城の人心を動かす。坐中、此の宴席中に、有老沙場客、久しく邊地に留まりし客あり。橫笛休吹塞上聲、此の塞上の曲聲を沙場に老いたる人に聞かせば、感慨無量なるものあらん、故に之を奏し玉ふな。

【評論】 此の篇邊將の邊聲を聞くを厭ふ情を寫して徹底せり。鍾伯敬曰く雄整。

退朝望終南山

李拯

紫宸朝罷綴鶴鸞。丹鳳樓前駐馬看。唯有終南山色在。晴明依舊滿長安。  
紫宸朝より罷きて鶴鸞を綴す、丹鳳樓前馬を駐めて看る、唯終南山色の在  
有り、晴明舊に依つて長安に滿つ、

【略傳】 李拯字は昌時、咸通末の進士、考功郎中に累遷す、黃巢が亂に、地を平陽に避く、僖宗召



して翰林學士と爲す。

【句釋】退朝望終南山、僖宗が再び寶雞に幸す、拯、扈從及ばず、鳳翔に在り、襄王僭號し、逼りて翰林學士と爲す、拯既に僞署に汚れ、心自ら安んぜず、後朱玫、政を乗る、百揆斂無し、典章濁亂、拯嘗て朝より退き、馬を國門に駐め南山を望み、吟じて涕泣す、王行瑜、朱玫を殺し、襄王京を出づるに及んで、拯は亂兵の爲め殺さる、紫宸朝罷綴鶴鸞。上の四字は何人も知る、綴鶴鸞は何ぞ、綴は「ツバル」鶴鸞は官人、退朝の文官武官が列を爲して出る形容なり。丹鳳樓前駐馬看、是れは李一人が馬を駐めて看る。唯有終南山色在、清秀の氣を終南山色の一に歸す、此の山色を除きて、多くの鶴鸞は清秀にあらざるなり。清明依舊滿長安、長安城に映じて其の清秀の氣を送ること舊に依て然りとなり。

【評論】此の篇、肺腑より出でたる感慨の語、自然に生氣多し。傲子發曰く、亂後朝に還る、唯山色有りて舊の如し、凡そ甲第文物、昔時に異なり、悲慨の詞寫し得て穠麗。蔣春甫曰く、唯有依舊の四字是れ詩眼。

華清宮

崔魯

草遮回磴絕鳴鑾。雲樹深深碧殿寒。明月自來還自去。更無人倚玉闌干。

草回磴を遮りて鳴鑾を絶し、雲樹深深として碧殿寒し、明月は自ら來り還り自ら去る、更に人の玉闌干に倚る無し、

【略傳】崔魯は僖宗の廣明號の進士、無机集詩四卷あり。

【句釋】華清宮は、驪山の温泉宮なり、唐太宗建、天寶六年、玄宗、驪山に如き、改めて華清と名く。草遮回磴、山路を磴と曰ふ、草が茂る。絶鳴鑾、車に付くる鈴を鑾と曰ふ、今日は草が茂る、天子の幸は無い。雲樹深深、雲も深く樹も亦深し。碧殿寒、華清宮が何と無く寂寞なり。明月自來還自去、人の來去無き反對に、明月が來去する。更無人倚玉闌干、昔は玄宗と云ふ人、貴妃と云ふ人が闌干に倚り、私語なぞしたが、今日は此の如き人なし。

【評論】此の篇、胡元瑞の評に云ふ、三四の句、李太白の「春風限り無き恨を解釋して、沈香亭北闌干に倚る」と同じく玉環貴妃の事を詠じ、崔は意、精工を極む、李は語筆に信すに由る、然れども並論に堪へざる者は直ちに是れ氣象同じからず。楊升菴曰く、崔が華清宮四首各精練奇麗、遠く李義山、杜牧の上に出づ、一首を録す。障は金鷄を掩うて禍機を蓄ふ、翠華西より蜀雲を拂つて飛ぶ、珠簾一たび閉づ朝元閣、人の歸るを見ず燕の歸るを見る。



古離別

韋莊

晴煙漠漠柳毵毵、不那離情酒半酣。更把玉鞭雲外指、斷腸春色在江南。  
晴煙漠漠柳毵毵、離情を那んともせず酒半酣、更に玉鞭を把りて雲外を指す、  
斷腸す春色江南に在るを、

【略傳】 韋莊、字は端己、京兆杜陵の人、昭宗の乾寧元年の進士、校長郎を授く、王建僞蜀を開く、  
莊時に華州に在り、駕前、使を奉じて蜀に入る、李詢辟して判官掌書記と爲す、起居舍人に遷る、  
後蜀の相と爲りて卒す、浣花集あり。

【句釋】 古別離は一に「送別」に作る、人と別を惜しむ詩とす。晴煙の團を爲す形容を漠漠と云ふ、  
柳の枝が長き形容を毵毵と云ふ、江南の春色は、此の如し。不那は俗語の「ドウスル」モデキズ、  
なり。離情酒半酣、酒は恰かも好けれど愁は却て甚だし。更把玉鞭雲外指、雲外を指して君は玉鞭を  
揮うて征かんと欲するが、斷腸春色在江南、吾は晴煙漠漠の地に於て君と分る、君も此の別處の江  
南に斷腸の情はあらんがとの氣味。

【評論】 此の篇、別離を惜んで、江南の佳を叙するもの。高廷禮曰く、晚唐絶句の盛、數千篇に下  
らず、興象同じからずと雖も、而かも聲律亦遠からず、韋莊が「後出塞」及び「贈別詩」尙ほ盛

唐の餘韻あり。

宮詞

李建勳

宮門長閉舞衣閒。畧識君王鬢便斑。却羨落花春不管。御溝流得到人間。  
宮門長閉して舞衣閒なり、畧識す君王鬢便ち斑なるを、却つて羨む落花春管  
せず、御溝流れ得て人間に到る、

【句釋】 李建勳は「唐書」に傳無し、或は云ふ隴西の人、南唐に仕へて丞相と爲る。宮詞、宮中  
特に宮女の失意者に就いて咏す。宮門長閉、宮女と爲りて寵を得るにもあらず、亦辭去するも得ず、  
徒らに幽閉せらるゝが如し。舞衣閒とは、閑の字に味あり、忙の反對なれば、ツマリ美麗な衣服も  
ムダなりとの意。畧識は詳識の反、少しく識つて居る。君王鬢便斑、天子も妾を愛して呉れざるは  
年も老いて頭は白なればなりと。却羨落花春不管、落花は多くの人は無情なりと言ふが、妾は却つ  
て此の落花を羨む、なせ羨むと言はゞ、宮中の春なぞに戀せず、御溝流得到人間、宮中より自由  
に出でて以て人間に到り、我が心の思ふ儘にする、是れ羨む所以なり。

【評論】 此の篇、作者の傳は未詳なるも晚唐の人たること疑ひ無し、然れども宮人の心情を寫して  
極めて陋劣、其の字は醜ならざるも、其の意は頗る醜、天子の寵は無きも、世間へ出づれば、夫は



何人でも有ると云ふ氣味になる。唐汝詢曰く、宮詞摹寫此に至りて少伯王昌齡 渾厚の風蕩然たり。真に唐詩を解する者は晩唐を以て下劣と爲す所以なり。

水調歌第一疊

張子容

平沙落日大荒西。隴上明星高復低。孤山幾處看烽火。戰士連營候鼓擊。  
平沙落日大荒の西、隴上の明星高復低、孤山幾處か烽火を看る、戰士營を連ねて鼓擊を候ふ、

【略傳】張子容は襄陽の人、孟浩然と友たり、盛唐の人たる知るべし。

【句釋】水調歌、水調商調曲煬帝の製する所、曲成りて之を奏す、聲韻怨切、王令言、之を聞いて弟子に謂つて曰く、但去聲有り、而して回韻無し、帝反せず、反省せざば、果して其の言の如し、蔣一葵曰く、按ずるに唐曲凡十一疊、前五疊、歌たり、後六疊、入破たり。平沙落日大荒西、甘肅省の邊境を言ふ。隴上明星高復低、日落ちて後、明星出づ、原頭に在りて之を見る、近きものは高く遠きものは低し。孤山、孤山寨は延安府綏德州の東北に在り。幾處看烽火、警備の嚴なる知るべし。戰士連營候鼓擊、幾處と連營と對し、看烽火と候鼓擊と對す、烽火は我の方、鼓擊は彼の方。

【評論】此の篇、拗體を以て出す。唐汝詢曰く、落日明星の語自から藻麗。

梁州歌第二疊

朔風吹葉雁門秋。萬里煙塵昏戍樓。征馬長思青海上。胡笳夜聽隴山頭。  
朔風葉を吹く雁門の秋、萬里の煙塵戍樓に昏し、征馬長思す青海の上、胡笳夜聽く隴山の頭、

【句釋】涼州歌第二疊、一名宮調曲、開元中西涼府の都督郭知運が進むる所、前一疊歌たり、後二疊、排遍たり、按ずるに樂府雜錄曲調に大遍、小遍、曲遍、繁聲あり、之を入破と謂ふ。朔風吹葉、秋晚冬初の景。雁門秋、并州に屬して雁門郡あり、秦の置く所。萬里煙塵昏戍樓、煙塵の揚るは漢兵と蕃兵と戦ふなり。征馬長思、思は悲くなり。青海上、青海の畔は從來戦ふに廣闊なればなり。胡笳は征馬と對す。夜聽は長思と對す。隴山頭は青海上と對す。

【評論】此の篇、鍾伯敬の評に、平平の語、却て又人を悲しましむ。

水鼓子第一曲

雕弓白羽獵初回。薄夜牛羊復下來。夢水河邊青草合。黑山峰外陣雲開。  
雕弓白羽獵初めて回る、薄夜牛羊復下り來る、夢水河邊青草合し、黑山峰外



陣雲開く、

【句釋】水鼓子は張祐が胡渭州詩に辨せし如く、蓋嘉運が進むる所のもの、邊戍行旅の懐を逃ぶる曲。雕弓は美麗なる弓、白羽は矢、獵初回、邊地に於て獵より回り來る。薄夜は日暮なり、牛羊復下來、野飼にしてある牛や羊が各舎に歸る。夢水河邊青草合、此の夢水河の所在は未詳。黑山は沙漠中に在り。峯外陣雲開、戰は爲さざるが故に、陣雲開と云ふ。夢水河邊と黑山峯外と對し、青草合と陣雲開と對す。以上三首悉く三四の二句を對す。

【評論】此の篇工ならず、拙ならず、曲としてのもの大底此の如し、吳吳山は以上の三首、張子容の作にあらず、古樂府なりと、又一説に無名氏作と、共に所據なし、今通行本に隨つて張子容と爲す。

雜詩

陳祐

無定河邊暮笛聲。赫連臺畔旅人情。函關歸路千餘里。一夕秋風白髮生。

無定河邊暮笛の聲、赫連臺畔旅人の情、函關の歸路千餘里、一夕の秋風白髮生す、

【句釋】陳祐は「唐書」に傳を缺く。無定河は一に奢延水と名く、又銀水と名く、唐に銀州を立つ、

東北に無定河あり、即ち圍水なり、後人潰沙急流深淺定まらざるを以て、今の名に變たむ、今日の直隸省と盛京省の間に在り。暮笛聲、胡人が河邊に在りて日暮笛を吹く。赫連臺は即ち無定河に近接せる地、寧夏衛城の東南黄河の岸に在り、晋の時赫連勃勃が築く所「晋書」に、勃勃、天王を僭稱し、國を大夏と號す、自ら言ふ帝王は天に係りて子と爲す、是を徽赫と爲す、實に天と連なる、今姓を改め赫連氏と曰ふ。旅人情、笛を聞いて堪へ難きは是れ旅人なり。函關は函谷關、河南の靈寶縣。歸路千餘里、老子が西に度るも、田文が東に出づるも、共に此の關に憑る、無定河とは此に至る千里を隔つ。一夕秋風白髮生、笛聲を聞くに依つて一夕に白髮が生ず。

【評論】此の篇、征戍者の情を寫して一字一涙なるもの。

初過漢江

無名氏

襄陽好向峴亭看。人物蕭條屬歲闌。爲報習家多置酒。夜來風雪過江寒。襄陽好向峴亭に向つて看るに、人物蕭條として歲闌に屬す、爲て報す習家多く置酒せよと、夜來風雪に江を過ぎて寒し、

【句釋】漢江は即ち漢水なり、源は陝西の寧羌州嶓冢山に出で、襄陽府の東南大別山に至りて江に入る。襄陽好向峴山看、襄陽縣に峴山あり、峴山の上に峴亭あり、此の峴亭より襄陽を下瞰する



人物蕭條、百萬人居るも、二百萬人住するも、蟲の如き人間で傑物は居らず。屬歲闌、臘月に逼る、臘月は節時も蕭條と爲す、人物節物共に蕭條たるなり、爲報、是の故に我が報するぞ。習家、後漢の襄陽侯習郁は岷山の南に習家池を穿つ、中に釣臺を築き、秋竹夾植蓮茨水を覆ふ、是れ游宴の名處、「襄陽記」に出づ。多置酒、晉の山簡、襄陽を鎮す、唯酒に是れ耽る、習氏は荆士の富豪、佳園池あり、山簡出でて嬉遊する毎に、多く池上に之きて置酒し、輒ち醉ふ、之を名けて高陽池と曰ふ、今我は古の山簡の如き者なり、汝等富豪は我が爲に宜しく馳走すべきなり。夜來風雪過江寒、昨夕漢江を風雪中に過ぎ來りし故に我は其の寒に堪へずとなり。

【評論】此の篇、此の時代、習姓の富豪あるも、吝にして施を爲さざる者を諷諭して作りしならん、作者の名を無名氏と爲したる所以なり。

胡笳曲

無名氏

月明星稀霜滿野。氈車夜宿陰山下。漢家自失李將軍。單于公然來牧馬。

月明に星稀にして霜野に滿つ、氈車夜宿す陰山の下、漢家李將軍を失せしより、單于公然として來つて馬を牧す、

【句釋】胡笳曲は題として詩の表面に其の意表はれざるが、裏面には笳聲の多き所以彰彰たり。

月明星稀は魏の曹操が句なり、晴夜の景色を言ふ。霜滿野、月明が霜の如く野に滿つる意なり、夜の白きを言ふ。氈車は即ち毛席「ケムシロ」夜宿陰山下、陰山の下に氈車に臥し、以て笳聲を聞く。漢家自失李將軍、漢の李廣は雄武常に匈奴を怖れしめし者、元狩四年李廣は大將軍衛青の副將と爲り匈奴を撃つ、東道に出づ、東道は案内役なり、誤つて道を失し、大將軍に後る、衛青急に廣を責めて簿に對せしむ、簿は軍中の事を記する文吏なり、廣其の麾下に謂つて曰く、廣、結髮匈奴と大、小七十餘戰、今道を失す、豈天に非ずや、且廣年六十餘、終に復刀筆の吏に對する能はずと、遂に刀を引いて自刎す、一軍皆哭す、百姓之を聞いて、知と不知と老壯と無く、皆爲に涕を垂る。單于は前に辨せり。公然、畏れずして堂堂。來牧馬、李將軍を失はざる時は單于が公然として漢地へ來り牧馬すること能はず、將軍無きが故に單于が勝手の行動を取る。

【評論】此の篇、李將軍を借りて以て唐代英雄なきを諷諭す、名を出さざる所以、仄韻の詩、古風を帶ぶるを以て今體の平仄法の如くならず、一本、明を朗に作る、若し然らば、結句の單于公然の四平も亦改めざるべからず、起句も依然古調を以て月明にて可なり。蔣春甫曰く、直にして爽。

塞上曲

王烈

紅顏歲歲老金微。沙磧年年臥鐵衣。白草城中春不入。黃花戍上雁長飛。



紅顏歲歲金微に老ゆ、沙磧年年鐵衣に臥す、白草城中春入らず、黃花戍上雁長く飛ぶ、

【句釋】王烈は、「唐書」に傳を欲く。塞上曲は樂府題。紅顏は少年兵と爲る者。歲老金微、居延の塞上に在る山を金微と名く、從征して此の金微山下に歲又歳を経過する。沙磧年年臥鐵衣、鐵衣にて年年沙磧に臥すの意、倒裝句法として、此の如く用ひたるなり。白草城、「唐書地理志」に、武州の蕭關縣他樓城に治す、神龍元年白草軍を置く、蔚茹水の西に在り。中春不入、夏秋冬の蕭條たる景色はあり、春色の温麗は塞上に無き所なり。黃花戍、平州の北平郡に黃花戍、白狼戍等の十二戍を置く。上雁長飛、春が來らざる故に雁も更に北飛する能はず、長く此の黃花戍上に飛ぶ所以。

【評論】此の篇、紅と金と鐵と白と黃との五色を點綴して以て索寞の景を叙す。蔣春甫曰く、對法好。鍾伯敬曰く、鐵衣金微、對し得て天然、老字臥字俱に映じ得て好し。唐汝詢曰く、上聯征戍の久しきを見はし、下聯風土の惡しきを見はす。

其二

孤城夕對戍樓閒。廻合青冥萬仞山。明鏡不須生白髮。風沙自解老紅顏。

孤城夕に戍樓に對して閒なり、廻合す青冥萬仞の山、明鏡白髮を生ずること  
を須たず、風沙自解す紅顏老ゆることを、

【句釋】孤城夕對戍樓閒、孤城と戍樓と相對して共に無事なるを言ふ、戰を爲さざる時なり。廻合青冥萬仞山、孤城外の景色を見れば、青冥は雲を言ふ、萬仞の山が四面に廻合するのみ。明鏡不須生白髮、明鏡に照して見ざるも已に白髮の生じたるを知る。風沙自解老紅顏、此の如き風沙の激しき地に久住しては紅顏の衰へたるを意識するに難からずとなり。

【評論】此の篇、前首と同じく、青と白と紅との色彩を以て意義を爲す。蔣春甫曰く、塞上の曲多し、此の二首の如き最も酸楚。

邊詞

張敬忠

五原春色舊來遲。二月垂楊未挂絲。即今河畔氷開日。正是長安花落時。  
五原の春色舊來ること遅し、二月垂楊未だ絲を挂けず、即今河畔氷開く日、  
正に是れ長安花の落つる時、

【句釋】張敬忠は、「唐書」に傳を缺く、張孝忠は傳あるも、恐らくは別人ならん。邊詞は邊土の節序を言ふ。五原は唐代關内道鹽州今の甘肅肅夏府靈州の東南、吐蕃の爲め領せられし地。春色舊來



遅、字の如く北邊春の來ること遅きなり。二月、西曆の二月は唐曆の一月、唐曆の二月は新曆の三月末に當る。垂楊未挂絲、春柳が猶ほ冬柳の状態に在る。即今は只今と同じ。河畔氷開日、纔かに氷が融けし日は。正是長安花落時、二月は現今の三月末なれば、長安城は花の落つる時、是れ氣候の順なるなり、起句に春色の字あり、結句花の字無かるべからず。

【評論】此の篇、北地の苦寒を叙し、自然の巧妙を爲す、晚唐人には決して此の氣格無し、中盛唐の人の作とす。

九日宴

張諤

秋葉風吹黃颯颯。晴雲日照白鱗鱗。歸來得問茱萸女。今日登高醉幾人。

秋葉風吹いて黃颯颯、晴雲日照して白鱗鱗、歸來茱萸の女に問ふを得、今日登高幾人を酔はせしと、

登高幾人を酔はせしと、

【句釋】張諤は「唐書」に傳を缺く。九日宴、九月九日登高して菊酒の宴を開きしなり。秋葉風吹黃颯颯、秋葉は翻翻、秋風は颯颯たり。晴雲日照白鱗鱗、晴天の雲態は魚の鱗の如きなり。歸來得問茱萸女、此の茱萸女を典公は歌妓輩と言ふ、歌妓にはあらず、茱萸を賣る普通民家の女子を言ふ、今日「花の日會」に花を賣る女の如き者なり、登高より歸來して問ふ。今日登高醉幾人、酔の字の

考へ様に依つて歌妓とも見られる、是れは讀者の解釋の仕方なり、蓋し酔うた人は富人にて、酔はざる人は貧人なり、贅澤に此の佳節を爲せし人は何人なりやと問訊する。

【評論】此の篇、一二の句、對を成し、己れ樂しまず、却て他家の樂を爲したる者の狀を言ふ、漂泊して九日に遇へるならん。蔣春甫曰く怨んで怒らず、味は其の露骨ならざるに在り、

西施石

樓穎

西施昔日浣紗津。石上青苔思殺人。一去姑蘇不復返。岸傍桃李爲誰春。

西施昔日浣紗の津、石上の青苔人を思殺す、一たび姑蘇に去つて復返らず、岸傍の桃李誰が爲に春なる、

【句釋】樓穎、「唐書」に傳を缺く。西施石は前にも辨せしが、一名浣紗石、西施が貧家に在りて衣服を洗ひし石なり。昔日浣紗津、越中の會稽郡に在る溪を、後人名けて浣紗津と曰ふ。石上青苔思殺人、後人が此の石上の青苔を見て思に勝へざるを言ふ、國を亡ぼすまでに至りし一婦の歴史あればなり。一去姑蘇、越王勾踐は此の西施を求め來りて、吳の夫差に送り、夫差は此と姑蘇臺上に遊宴して遂に國を亡ぼすに至る、去の字誤りと云ふは非なり、行の意味なり、行き去るなり、故に不復返、單に行く向ふでは返る期あり、去は返らず、「訓解」の字義に暗きこと一笑すべし。岸傍桃李爲



誰春、桃花李花が岸傍に發くも畢竟誰に賞せられん爲ぞや、花の如き美人今在らざればなり。  
【評論】 此の篇、單に石を詠するに在れば、深く諷諭するの所あらず。鍾伯敬曰く、石上青苔の四字、癡に似て是れ實境。蔣春甫曰く、意餘思あり。

和李秀才邊庭四時怨

盧弼

春衣昨夜到榆關。故國煙花想已殘。小婦不知歸未得。朝朝空上望夫山。  
春衣昨夜榆關に到る、故國の煙花想ふ己に殘らん、小婦は知らず歸ること未だ得ざるを、朝朝空しく上る望夫山、

【句釋】 和は和作。李は姓。秀才は敬語。邊庭は征戍者が朔邊に在るもの。四時怨、春夏秋冬の四時に就いて怨を叙ぶる詩とす、此の詩は春怨とす。春衣は婦から夫へ送りし衣。昨夜到榆關、此の榆の字の附く地は大底邊地とす、單に榆は喀喇沁の地、臨榆は幽州、撰榆は雲南、榆谷は甘肅、榆關は唐代關内道銀州、今の直隸省永平府撫寧縣の東二十里に在り。故國は夫の故郷を言ふ。煙花想已殘、花の殘なるは、春の暮るゝなり。小婦は即ち妙齡の妻。不知歸未得、從軍者は誰か自由に歸ることを得ん、歸るときは凱旋か又は死骨と爲つてなり。朝朝空、此の空を一本應に作る、應の字、餘韻あり。上望夫山、「九域志」に、昔人あり、楚に適いて還らず、其の妻山に登りて夫を望み、

化して石と爲る、山は當塗縣に在り、正に和州郡の樓に對す、今の安徽省太平府、夫は察するに安徽省の人ならん。

【評論】 此の篇、婦夫を想ふの情、掬すべきものあり、四篇中傑出せるもの。

其二 夏

盧龍塞外草初肥。雁乳平蕪曉不飛。鄉國近來音信斷。至今猶自著寒衣。  
盧龍塞外草初めて肥え、雁平蕪に乳して曉飛ばず、鄉國近來音信斷ゆ、今に至るまで猶自から寒衣を著く、

【句釋】 盧龍塞は唐代河北道平州、今日の直隸省永平府盧龍縣治なり、乳は雁が雛を哺乳する、雁は春に至りて北し、夏は則ち渤海に乳す。曉不飛は、其の子を護るなり。著寒衣は夏猶ほ冬服なるを云ふ、

【評論】 此の篇、唐人としては最も拙なるもの、但其の數に備へしに過ぎず。

其三 秋

八月霜飛柳遍黃。蓬根吹斷雁南翔。隴頭流水關山月。泣上龍堆望故鄉。



八月霜飛んで柳遍く黄なり、蓬根吹き断つて雁南に翔る、隴頭の流水關山の月、泣いて龍堆に上りて故郷を望む、

【句釋】八月霜飛、秋風厲しければ、霜を飛す。柳遍黄、春夏の時青葉なるも、秋に至り黄葉と化す。蓬根吹断、秋風が厲しく江水を吹けば蓬の根断ゆ。雁南翔、秋なれば、雁は南飛し去る。隴頭流水は笛の曲名。關山月も笛の曲名、共に征戍者の事を詠せしものなり、「秦州記」に隴西郡一百六十里隴山と爲す、秦人西役此に至り首を回らして悲泣せざるは莫し、隴水歌を爲る、曰く「隴頭の流水、鳴聲嗚咽す、遠く秦川を望み、肝腸断絶す。關山月は別離を傷む。泣上龍堆望故郷、甘肅の燧煙と西關外に白龍堆沙あり、

【評論】此の篇、夏に比すれば、非常に優る。譚元春曰く、音調頓挫、唐の矯健と稱する者。

其四 冬

朔風吹雪透刀瘢。飲馬長城窟更寒。夜半火來知有敵。一時齊保賀蘭山。  
朔風雪を吹いて刀瘢に透る、馬に飲うて長城の窟更に寒し、夜半火來りて敵有るを知る、一時に齊保す賀蘭山、

【句釋】朔風は北風。吹雪透刀瘢、手に受けし刀の疵へ風雪が透入す。飲馬長城窟更寒、始皇の二

十四年太子扶蘇と蒙恬とをして長城を築かしむ、臨洮即ち今の甘肅鞏昌府岷州より、碣石即ち今日の西藏、東は遼海に及び、西は陰山に並び八萬餘里、今其の下往往、泉窟あり、馬に飲ふ可し、之を問ふに皆秦、城を築き卒水を取る處と。夜半火來、烽火舉がるを言ふ。知有敵、敵來らざれば火も亦舉がらず。一時齊保、烽火を見て成卒が一齊に成に就く。賀蘭山は、内蒙古より起りて甘肅に及び、山草多く白し、遙かに望めば青色駁駁るを言ふ、俗語の「ブチシナリ」の如し、北人駁を呼んで賀蘭と爲す、鮮卑山谷に因つて氏族と爲す。

【評論】此の篇、調として四首中第一に屬す、然れども寒は十四寒の韻にて十五刪にあらず、故に顔に作る本あり、顔では意味を爲さず、陳淋の詩に「馬に飲ふ長城窟、水寒うして馬骨を傷る」に依りしものなれば、作者も寒の字を用ひしならん、其の失體に氣が付かざりしならん。胡元瑞曰く、四時語意新奇、韻格超絶、此れ盛唐の高手疑ひ無し。謝茂秦曰く、和邊庭四時怨、極めて太白が絶句に似たり。蔣春甫曰く、言外に鋒鏑の懼あらしむ。

宿疎陂驛

王周

秋染棠梨葉半紅。荊州東望草平空。誰知孤宦天涯意。微雨瀟瀟古驛中。  
秋棠梨を染めて葉半紅し、荊州東に望めば草空に平らか、誰か知らん孤宦天



涯の意、微雨瀟瀟たり古驛の中、

【句釋】 王周は「唐書」に傳を缺く、蔣春甫曰く、周、誌峽船具の詩あり、自序に云ふ、魯望が茶經に庶幾する者なり、當に是れ晚唐人なるべし、「集注」に曰く、王周は五代魏州の人、此の詩定州敗後の作。疎波驛は未詳。秋染棠梨、棠は甘棠即ち小林檜、梨は「ナシ」葉半紅、秋の爲め葉が紅色と爲る。荊州は湖北に屬す。東望草平空、一面に空に平らかなる如く見ゆるなり。誰知孤宦天涯意、孤宦は小宦又は微官と同じ、又獨客と見ても可なり。微雨瀟瀟古驛中、天涯蕭條の意に勝へざるに加へて、古驛に宿し、夜雨の瀟瀟たるに遇ふ、寂寞の思に堪へざるなり。

【評論】 此の篇、客中寂寞の狀を寫して、妙神に入る、其の味說破せざる處に在る、王周別に巴東に宿する詩あり、此の篇よりは劣ると雖も、亦誦すべし、曰く「偶ま宿す巴東古縣の前、宦情郷思兩ながら綿綿、堪へず蠟炬殘淚を燒くに、雨は船窗を打つ半夜の天、」

塞下曲

釋皎然

寒塞無由見落梅。胡人吹入笛聲來。勞勞亭上春應度。夜夜城南戰未回。  
寒塞落梅を見るに由なし、胡人吹いて笛聲に入れ來る、勞勞亭上春應に度るべし、夜夜城南戰うて未だ回らず、

【略傳】 皎然、字は清晝、俗姓は謝氏、湖州の人、靈運が十世の孫なり、顏真卿、韻海を撰す、皎然其の論著に豫る、杼山に居るを以て其の詩を杼山集と云ふ、十卷あり、亦詩式一卷を著はす、禪月と齊己と唐の三高僧と稱せらる、

【句釋】 塞下曲は、樂府題、前に辨せり。寒塞は磧土や沙土で草も樹も無い邊地。無由見落梅、草も樹も無い處、何ぞ落梅を見るを得ん。胡人は中土以外の人を總稱する語。吹入笛聲來、實際の落梅は見る能はざるも、胡人が吹く笛聲に落梅の曲がある、之を聞いて慰める一分となる。勞勞亭は一名臨滄觀、應天府の西南にある、吳の代之を建て、客を送る爲に置きし亭なり。春應度、春の度らざる勞勞亭上に春が度るは、即ち落梅の曲を胡人が奏すればなり。夜夜は勞勞に對字を取りしなり、上は亭の名なれども、夜夜は城の名にはあらず、笛聲を聞きしは夜なればなり。城南戰未回、征人は春が度らうが、秋が來やうが一向に關せず、戰爭して猶未だ回らざるなり、  
【評論】 此の篇、雄偉、頗る盛唐の面目を具す、「訓解」に曰く、塞上梅無し、唯笛中に於て之れ有り、然れども能く亭上の春に度る、未だ城南の戰を免かれず、是れ悲しむに足る、于鱗、塞下の諸作を選び、大都、後對の工なる者を取る、雕弓、朔風、平沙、寒塞の四章の如き、骨力高しと雖も風韻甚だ少し。蔣春甫曰く、對法好、閒處に緊を著く。鍾伯敬曰く、悲愁を説かず、悲愁已に寓す。本集二首あり、其の一左の如し、「都護今年武威を破る、胡沙萬里鳥空しく飛ぶ、旄竿澗海雲を



掃うて出で、甌騎天山雪を踏んで歸る」

僧院

釋靈一

虎溪閒月引相過、帶雪松枝挂薜蘿。無限青山行欲盡、白雲深處老僧多。

虎溪の閒月引いて相過く、雪を帶ぶる松枝薜蘿挂る、限り無き青山行いて盡さんと欲す、白雲深き處老僧多し、

【略傳】靈一は越中雲門寺の律師、持律甚だ嚴、清高を以て世の爲に推さる、劉長卿、皇甫冉、嚴維と往來倡和す、

【句釋】僧院は寺なり。虎溪は廬山の虎溪にはあらず、但其の名を借用せしのみ。閒月は主觀より見て言ふ、人も閒なれば月も閒に見ゆるなり。引相過、月影が悠悠と我を引いて行く。帶雪、此の雪は誤字で露の字ならんと、津阪東陽の説「松林雪封する時は、滿山皓皓溪路通せず、月も亦清光を凝らさず、豈能く人を引かんや、且薜蘿盡き、獨蔓存するのみ、何を以て其の挂るを見ん、下の青山の字も亦通せず、其の誤寫疑ひ無し、千百年讀者一人も其の誤を覺らず」信に然るを覺ゆ。松枝挂薜蘿、薜の字「唐韻」「集韻」「韻會」の三書共に音備「ビ」とある、「佩文韻府」は之を八霽の韻に收め、音備は誤なり「へイ」の音を以て正とすと、梵學者の文雄も此の説を取る、恐くは「へイ」

國譯唐詩選終

を以て正と爲す、「マサキノカツラ」是れなり、蘿と薜とは元來別物、今は一箇と爲す、詩に於て支障無し。無限青山行欲盡、山の究極する處まで、歩いて行きたるを言ふ。無限は山深ければなり、青山は白雲に對すればなり、盡の字は限の字を響かせん爲めなり。白雲深處老僧多、僧院に到達せる處、老僧に謁するが目的なればなり。

【評論】此の篇、人口に膾炙せる久し、粉飾無く、閒淡なる處、題目に副うて誦すべき價値あり、東陽の考證の如く、雪を露と改めなば、一層の妙ならん、月下僧院に在りて此の詩を吟ず、人寰外の思あらん。譚元春曰く、院景を寫し出して我をして山に入るの志頓に深からしむ。蔣春甫曰く、分明に畫き出す。徐伯呂曰く、皎師皎然深山に臥し、壑志滄洲を繞る、游從既に勝る、興致復遠し、其の詩深く色相を窺ひ、其の才力を騁す、諸衲間に在て一公靈一の外、卓として等しうすべき無し、一公の詩、復翦刻彌精と雖も律調、之を要するに泓泛微波、皎然に勝らず、而して淨密の致は終に當に獨歩すべし。唐汝詢曰く、語禪に入らずして、禪韻あり、是れ詩僧にして悟道の僧にあらず。唐の如きは蠟を嚼む如き「語錄」を讀んで以て悟道の僧と爲すなり、一公に於て毫髮も損する所無し。



大正九年七月廿二日印刷  
大正九年七月廿五日發行

國譯漢文大成 文學部 第五卷

〔非賣品〕

編輯者兼  
發行者

國民文庫刊行會  
東京市神田區小川町一番地

右代表者

鶴田久作  
東京市本郷區西片町十番地

印刷者

栗原輝吉  
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所

株式會社博文館印刷所  
東京市小石川區久堅町百八番地

### 著作權所有

發行所

電話神田三二六〇番  
振替東京一八五七二番

國民文庫刊行會



中華書局出版

新編國語

第一冊	第一冊	第一冊	第一冊
第二冊	第二冊	第二冊	第二冊
第三冊	第三冊	第三冊	第三冊
第四冊	第四冊	第四冊	第四冊
第五冊	第五冊	第五冊	第五冊
第六冊	第六冊	第六冊	第六冊
第七冊	第七冊	第七冊	第七冊
第八冊	第八冊	第八冊	第八冊
第九冊	第九冊	第九冊	第九冊
第十冊	第十冊	第十冊	第十冊

中華書局出版

中華書局出版

中華書局出版







